

2014. 10. 15 (火)

研究と孤独

村田 泰子

孤独のポジティブな効用

今週のチャペルのテーマは、「孤独」です。最初、このテーマを聞いたとき、難しいテーマだと思いました。というのも、通常、チャペルの時間には、みなさんに明るい気持ちになって帰ってもらえるような話をしたいと思うのですが、孤独というのは通常、否定的なものとして語られがちで、孤独のポジティブな側面について語る言葉が、すぐにはみつからなかったからです。

手始めに、辞書で「孤独」という言葉の意味を調べてみました。辞書には、「一人でいること」や、「大勢のなかにも、自分の事が人に理解されていないと思うこと」など、やはり否定的な定義が並んでいました。つづいて、英語で孤独はどのように表現するのだろうかと思い、調べてみたところ、「isolation」とか、「solitude」とか、「detached」とか、「loneliness」とか、やはり、英語でも、一人でいることや、ほかと切り離されてあること、またそうした状態から生じる寂しさなど、肯定的なことは書かれていませんでした。

しかし、それと同時に、わたしには、孤独は人生において、必要なものである、いいものであるという確信もありました。それをう

まく言葉でお伝えできるか、自信がないのですが、今日は、わたしがまだ、駆け出しの研究者だったころから、今日まで感じつづけてきた、ある種の孤独について、話してみようかと思いつきます。それは、わたしにとって、つらい、しんどい気持ちを抱かせるものでもありましたが、同時に、研究をつづけていくうえで、モチベーションとなって自分を後押ししてくれる、そんな種類の孤独でもありました。

社会学者、見田宗介さんの研究と孤独

わたし自身の話をするまえに、わたしたちの大先輩が書いた、一冊の本を紹介しましょう。社会学者の見田宗介さんが書いた、『社会学入門』という本です。見田さんは、戦後日本を代表する社会学者で、東京大学で30年以上にわたって教鞭をとったかたです。『まなざしの地獄』という、とても有名な本を書いたので、名前ぐらいは知っている人もいるかもしれませんね。

さて、『社会学入門』のなかで、見田さんは、孤独という言葉こそ使ってはいませんが、彼自身が幼少期から感じてきたある種の孤独について、非常に印象的なことを書いています。「自分は7歳のときから、心のなか

に、二つの原問題とも言うべき、本当に根本的な最初の疑問、あるいは問いがあった。それは死に対する恐怖とニヒリズムである」。死への恐怖も、ニヒリズムも、どちらもあまりに大きな問題で、自分には無縁と思われるかもしれませんが、みなさんも小さいときに、人は死んだらどうなるのだろうか、死ぬって恐ろしいなとか、考えたことはないですか。ふつう、そうした疑問は、勉強したり遊んだりしているうちに後回しにされ、そのうち、忘れてしまうのですが、見田少年は、そうではありませんでした。見田少年にとって、その問いが明らかにならない限りは、人生はとても恐ろしく、理解しがたいものと見えていたのだと思います。

さて、成長して、研究者となった見田さんは、これら二つの問題——死に対する恐怖とニヒリズム——について、学術的に探究をつづけました。死というのは、社会学のなかで扱われるテーマではありますが、伝統的に、宗教学や哲学が扱ってきたテーマでもあります。見田さんは、宗教学や倫理学、哲学だけでなく、経済学や文学など、あらゆる分野の本を開いてみたそうです。それは、今流行の言い方をすると、「領域横断的な」探求の仕方だったと言えるかもしれませんが、最初から、領域横断的であることを目指したわけではなく、自分の納得する答えを探し求めた結果、そうだったということです。

その探求の過程で、見田さんは、現代の学問というものが、非常に分断されていて、学問ごとの分野の壁が高いことに驚いたといいます。それを、見田さんは、「あちらこちらで、立ち入り禁止の立て札が立てられているような状況」と表現しています。言い換えれば、彼は孤独であったわけです。そうした孤

独に耐えて研究を続けた結果、見田さんは、ついに40歳のときに、自分なりに、納得のいく答えをみつけたのだそうです。40歳ですよ、40歳。わたしも先年、40歳を超えましたけれど、見田さんほどの見識の人が、それだけ時間をかけたのだから、そうか、わたしもそのぐらい時間をかけていいのだなと、わたしはその文章を読んで、少しほっとした気持ちになったものです。見田さんほどの、私なんかとは頭の出来も全然違うような大学の先生でも、それだけの時間をかけて掘り下げて、とことん考え抜いて、答えを見つけたのだということ、そのことは、私にとっても勇気を与えてくれました。

わたし自身の研究と孤独

さて、いよいよ、わたし自身の話をしたいと思います。わたしの研究テーマは、授業を受けたことのある人は知っているかと思いますが、一言でいえば、「母親であること」の社会学です。現代社会に生きる女性にとって、母親であること、あるいは母親になることというのは、いったいどのような経験であるのか。医学やその周辺領域では、「母性」という概念のもと、母親であることを、生物としての自然な状態と位置づけ、介入や支援の対象としてきました。そこでは、母性というものは、たとえて言うなら、乳房や子宮といった身体的器官と同じくらいに、疑う余地のない、確かのとみなされてきたように思えます。

私自身、母性という言葉さえ知らない、うんと幼いころから、自分は将来、当りまえのこととして、子どもを産み、母親になるのだろうかと考えていました。わたしの母親がそう

だったし、母は、母親であることを自分の生活の中心に置いているような人でしたから、自分もきっといつの日か、母のようになるのだろうと漠然と思ってきました。

しかし、大学院に進学し、20代のすべてを研究に費やしてきたわたしにとって、母親になることは、それほど自然な選択ではありませんでした。結局わたしは、29歳で一人目の子どもを産んだのですが、母親になったことで、人生が突如、とても生きづらいものとなったように思えたのです。

それは、ひとつには、タイミングの問題であつたろうと思います。わたしは学部時代にイギリスに留学していた関係で、大学院に入ったのが人より遅かったので、出産したときには、未だに博士論文を書いていた。論文を書くためには、まとまった時間が必要です。ですが赤ちゃんはそんなことは構いませんので、生活は突如、時間とのたたかいになりました。

また、その年は、先輩から非常勤講師の仕事譲ってもらって、はじめて教壇に立った年でもありました。今でもよく覚えています。大阪にある看護学校で、週に一度、「人間関係論」という科目を教える仕事でした。わたしはそれまで、人より長く大学院に通ってきた分、お金の面でも、そのほかの面でも、親にもたくさん迷惑をかけました。ですから、ようやく一人前の社会学者として、自分がそれまで勉強してきたことを、教育というかたちで社会に還元することができるということは、わたしにとって、大きな喜びだったし、誇らしいことでもありました。しかし、いかにせん、タイミングが悪かった。当時、4ヶ月になったばかりの息子はまだ授乳中だったため、夫が非常勤先の看護学校に連

れてきて、近くのビルのトイレやベンチで、授乳をしたこともありました。できれば食事ぐらい、落ち着いた、きれいな環境でさせたかったですけど、当時はもう、つな渡りのようにして、一日一日を乗り切っている感じでした。

このように、母親になる時期と仕事が忙しくなる時期が重なることからくる葛藤は、研究者だけではない、一般企業ではたらく女性にも、当てはまることだと思います。よく言われるように、30代というのは、女性にとっても男性にとっても、だんだんと重要な仕事を任されるようになって、仕事が面白くなる時期です。それが、女性にとっては、家族形成の時期と重なってしまうことで、必然的に葛藤が生じるのです。

そうしたタイミングの問題に加え、いわゆるアイデンティティの問題でも、悩みました。わたしの母はいわゆる「専業主婦」で、わたしたちきょうだいは、保育所ではなく、幼稚園で育ちました。小学校に上がってからも、家に帰れば母がいて、いろいろと世話を焼いてくれました。母は主婦としては、なかなか優秀なほうだったのではないかと思います。そうした母親をみて育ったわたしは、自分も、母親になったらそのようにしなくてはいけない、そのようにできるはず、と考えていましたが、現実とは違っていました。わたしは母のように、やれない。そのことを受け容れるのに、時間がかかりました。

結局、上の子に関しては、一歳のときに保育所に預けることにしました。当時のわたしは、いま考えればおかしいくらいに、保育所を利用することに抵抗感があり、そのように早い年齢で預けることに対し、罪悪感というか、申し訳ない気持ちがしていました。たが

ん、わたしにとって、自分自身が、母からも認められるような、「よい母親」でいることが大事だったんだと思います。そうした気持ちがかんたんと変わってきたのは、子どもが子どもなりに、保育所のなかに、好きな先生や好きな空間をみつけ、楽しく過ごしている様子を見てからでした。子どもは、母親であるわたしのことが一番好きだけど、ほかにも好きな人や好きなものがたくさんあるということは、むしろ、よいことだと思えるようになりました。こんな時代だからこそ、集団のなかで、集団のちからを借りて、大きくなる。それがこの子に合った育ち方なのだと、心の底から、思えるようになったのです。それは、別の言い方をすれば、母親としての自分にあまりこだわりがなくなったというか、母とは違う、自分なりの母親像というものが、できてきたということだったのだと思います。

このように、自分自身が母親になってはじめて、気づくことはたくさんありました。母親であるという経験は、決して医学書に書かれているような、自然で静態的な状態ではなく、変化や葛藤に満ちた、ダイナミックな過程であったわけですが、当時、そうしたことを体系立てて教えてくれる書物はありませんでした。それがわたしにとっての孤独です。この孤独をバネに、わたしは母性について、いろいろなものを読みました。社会学や女性学のものを中心に、たぶん、たくさん読んだと思います。なかでも面白かったのは、「子殺しの母性」についての歴史研究でした。従来、母性は女性の本質だ、女性はつねに自分よりも子どものことを優先させる生き物だなどと言われてきたけれども、歴史をひもといてみれば、歴史をつうじて、女性たちは脈々

と子捨てや子殺し、中絶をしてきた、だから子殺しこそが女性の本質である、といった議論は、わたしには衝撃でした。また、わたしの母親が子育てをした時代、1970年代という時代が、家族の歴史からみて、どんな時代であったのか、それを解き明かす近代家族論や歴史人口学という枠組みも、面白く感じました。

母性をめぐるわたしの探求は、まだ、終わってはいません。先の見田宗介さんの話にもどると、見田さんは、彼の問いの探求に、7歳から40歳まで、33年間かかりました。見田さんは、自分はただ、自分にとって本当に大切な問題をとことん掘り下げていっただけだと言っていますが、至るところで「立ち入り禁止」の札に出会いながら、自分自身で道をつくっていく作業というのは、非常に孤独な作業だったと思います。しかし、1人の人間にとって大切な問題は、必ず他の多くの人間にとって大切な問題とつながっていると見田さんは言い切っています。もちろん、人間は一人一人違うので、わたしが感じている母親としての悩みや葛藤は、わたしの横で子育てしている別の母親が感じる悩みや葛藤とは、違っているかもしれないですが、わたしがいま、こうしてこだわっている問題は、きっと、誰かの役に立つとわたしも信じています。

孤独であることの幸運

今日のテーマである、孤独ということに即して言い直すなら、孤独には、何かを探求するうえで、重要なモチベーションとして機能する側面があります。誰かがすでに用意して

くれた学説に満足することなく、自分の納得する答えをとことん探求するという作業は、それ自体、とても孤独な作業ですが、そうした孤独の先にこそ、いい研究は生まれると思っています。孤独な自分をごまかして、探究をやめてしまうこともできますが、敢えて孤独にとどまり、問題をとことんまで考えぬくことができる人は、ある意味、ラッキーな人です。もしもいま、ここにいるみなさんのな

かにも、何か悩みや問題を抱えていて、自分の抱えている問題は、ほかの誰にも理解されないと感じている人がいるなら、あなたはラッキーな人です。孤独であるいまの状況を、ある意味、チャンスと考えて、たくさん本を読み、考えてください。社会学はそういうことができる学問だと思っています。

(社会学部准教授)